

令和 2 年 6 月 9 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K01629

研究課題名(和文) 広義のインクルーシブ体育における資質・能力育成の実証的研究-ケアに着目して-

研究課題名(英文) Empirical study on Authentic inclusive physical education

研究代表者

梅澤 秋久(UMEZAWA, Akihisa)

横浜国立大学・教育学部・教授

研究者番号：90551185

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、多様な学び手がそれぞれの良さを最大限に発揮する共生体育の在り方を探究した。

障がいの有無、性差、身体能力差、技能格差、年齢差等の差異を踏まえ、文化としてのスポーツ及び生きる基盤としての健康を共に学び合う体育の在り方を再構築した。実践研究から明らかになったのは、全ての学び手が「ちがいを相互に受容し合う学習ムードの醸成であり、運動に内在する本質的な特性を深く味わう学習デザインである。個々人が全力を発揮できるハンディルールを協働創発するアダプテーション・ゲームが、落ちこぼれも吹きこぼれもつくり、全学習者が運動に没頭できることが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

21世紀は共生社会の実現が不可避であり、加えて全ての人の健康を担保すべく豊かなスポーツライフの実現が求められている。本「共生体育」によって、体育授業場面で「できないから」「仲間に迷惑をかけるから」という理由で、運動・スポーツからの逃避していた学習者を運動世界に参入させることが可能になった。とりわけ自由の相互承認の感性を発揮し合うことで学級内の雰囲気を受容的になることが明らかとなった。また、全員が全力発揮可能なルール等「合意解」を協働創発する学びの過程において、思考力・判断力・表現力等の現代的な資質・能力の育成が可能になると考えられた。

研究成果の概要(英文)：In this research, we explored the way of physical education in diversity inclusion. Based on differences such as disability, gender difference, physical ability difference, skill gap, age gap, etc., we reconstructed the way of physical education that learns sports and health cooperatively. Practical research has revealed the following. (1) The foundation is to foster a learning atmosphere in which all learners mutually accept "differences". (2) A learning design that allows all learners to be absorbed in the essence of sports is required. The "adaptation game" was effective in making all learners addicted to sports. The "adaptation game" is a game in which all students work together to generate handy rules that can exert their full potential.

研究分野：身体教育学

キーワード：インクルーシブ 体育 共生 真正 互惠性 アダプテーション inclusive PE adaptation game

1. 研究開始当初の背景

(1) インクルーシブ体育について

MINEPS (第5回体育・スポーツ担当大臣等交際会議 2013)におけるインクルージョン(包摂)の思想を請け、UNESCO(2015)は Guideline of Quality Physical Education(QPE)を定めた。「質の高い体育」の中核はインクルージョンであり、そのQPEを踏襲し「体育・身体活動・スポーツに関する国際憲章」としてまとめている(UNESCO,2015)。同憲章の内容を学校体育に限定すればインクルーシブの対象は全ての児童生徒であるが、とりわけ性差、障害の有無、生育文化の違いを包摂すべきだと解釈される。これら国際的な課題と日本の子どもたちの現状を鑑みると、以下のインクルーシブ体育の課題が浮き彫りになる。すなわち、障害児と健常児の狭義のインクルージョン、男女共習の問題、外国とのつながりのある児童との共習、運動をする子としない子の格差を包摂する体育実践である。中教審(2016)は UNESCO 憲章を踏まえ、次期学習指導要領における体育科(保健体育科を含む、以下、体育)においては「特別支援教育の充実、個に応じた学習の充実」を掲げ、インクルーシブ体育を推進する方向で議論のまとめを報告している。そこではインクルーシブの具体例として、動作や対話手法・振り返りの視覚化、感情コントロールのルール化、スモールステップの提示等が掲げられているが、問題を未然回避する方法やケイパビリティアプローチ(セン 2006)が中心であり、健常児や運動ができる子等、対極の子どもたちの視点が十分とはいえない状況である。すなわち、ユニバーサルデザインが健常児に僅かなメリットは与えるものの、お世話をして「あげる/もらう」という一方通行の関係構築に陥る可能性を多分に秘めていると考えられるのである。インクルーシブの原点は共生であり、多様な格差が存在する中で互恵的な関係構築がなされる体育実践の在り方の検討が求められていると考えられる。

(2) ケア思想と教育的ケアリング

互恵的な教育デザインを考える上で重視されるのがケアの思想であり、行為や関係としてのケアリングである。メイヤロフ(1987)によれば「差異の中の同一性」によってケアする人とケアされる人の関係が構築されるという。ノディングズ(2007)はケアリング関係には「専心-受容-承認-応答」という「相互性」があるとしている。佐藤(2010)は、Educationの語源の一つはeducare(=ケアする)であるとし、新自由主義的な教育改革においてはもう一つの語源であるeducate(=引き出す)という要素が重視されていると述べている。体育は、富国強兵のための従順な身体形成(山下 2001)や高度経済成長期に併せて過度に体力向上を目指した(高橋 1999)歴史を有している。そのような過去の体育は一部の子どもを運動から逃避させたが、先述のUNESCO 憲章(2015)では世界中の全ての人々のウェルネスのための体育を提唱している。それは競争的にコンテンツを獲得させる educateの側面よりも、多様な他者同士がケアし合いながら高め合う edu-careの側面が重視されていると換言できる。梅澤(2015)は、学校体育におけるケアリングに着目し、自己と他者と運動世界との三位一体の対話的实践の中で、主体Aと主体Bとの専心-受容-承認-応答のケアリング関係を明らかにしている。そのようなケアリング関係が構築された場面では自己と他者とスポーツ/運動の境界線が廃され、互恵性が存在する学習空間になると論じている。現在の教育はコンピテンシーベースで考えられており、多様な他者とのコミュニケーション能力や生涯を通じて運動に親しむ資質の育成が全ての人々に希求されている。そのため、インクルーシブ体育が今後実践されていく中でケアリング実践の充実は益々重視されていくべきだと考えられる。

(3) 人間性に内在するケアリングを中核に据えた身体的リテラシーの育成

体育におけるケアリング(梅澤 2015)においては、先述の通り、自己と他者とスポーツ/運動との三位一体の実践でなければならないため、インクルーシブ体育においては、例えば障害のある子と障害のない子が共にスポーツや運動に没頭している学習空間が形成されなければならない。そのためには、ケアに直接関連する「人間性」だけではなく、「思考力・判断力・表現力」「個別の知識・技能」とも連動して育成すべきだと考えられる。しかしながら、過度に技能内容(コンテンツ)の習得に傾斜すれば、バランスの良い資質・能力の育成にはつながらないであろう。梅澤(2016)は、生涯を通じたウェルネスに向けた体育における中核を「身体的リテラシー」の育成としている。身体的リテラシーは、資質・能力をバランスよく身につけた状態であり、「いつでも、どこでも、誰とでも」スポーツや身体活動に参加できる動機と自信を有している状況だと換言できる。

総じて、インクルーシブ体育においては、ケアリングを基盤とし、協働的に身体的リテラシーの育成を目指すことが求められてくると考えられる。研究代表者は、運動ができる子とできない子に着目してケアリングがそれぞれの極の児童に与える影響をアクションリサーチで明らかにしている(梅澤・矢邊 2016)。しかし、障害の有無、性差、外国とのつながりのある子を包摂するインクルーシブ体育において、互恵性を重視したケアリング関係に着目した研究は未だなされていない。さらに、格差の中で互いが資質・能力や身体的リテラシーの育成といった多角的な視点から分析されたインクルーシブ体育の研究も散見されず、研究課題としての意義があると考える。

2. 研究の目的

本研究は、中教審(2016)の「学びに向かう力・人間性」の一部であるケアリング及び受容的共感的態度の視点を中核に据え、「個別の知識・技能」「思考力・判断力・表現力」と共に三位一体

で資質・能力を育成すべくアクションリサーチを行い、多様な格差を包摂する広義のインクルーシブ体育の在り方を実証的に明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

研究1年次には、多様な格差を踏まえた体育におけるケアリングの在り方を再検討すると同時に、「人間性」「思考力・判断力・表現力」「個別の知識・技能」の資質・能力を互恵的に育成する方略を、真正のインクルーシブ体育の視点から理論的に検討した。2年次以降は、1年次の理論を基盤にインクルーシブ体育の実証的研究を推進した。具体的には、運動格差の包摂、障害の有無、外国とのつながりがある児童・生徒の包摂、性差の包摂の4種の格差によるインクルーシブ体育の実践研究をアクションリサーチによって、その学び合いの様相を明らかにし、実践研究論文及び書籍としてまとめた。

4. 研究成果

(1) 〈共生体育の理論〉

まず、全ての学習者が「多様性を受容し合い、それぞれの能力を最大限に発揮する」という「ダイバーシティ・インクルージョン」の理念のなかで、豊かなスポーツライフに繋がる資質・能力の育成に資する体育を「共生体育」と定義づけた。別言すれば、文化としてのスポーツを学び合うなかで、健康で豊かなスポーツライフを送るという自由 に拓かれ、全ての学習者の自由の相互承認の感度を育む体育だといえる。

21世紀は、既存の正解の獲得でなく、オープンエンドな答えに対し、協働的に最適解を創造していく「主題-探究-表現」型のカリキュラムが重視される。「共生体育」においても、未知の状況に対して思考力・判断力・表現力を原動力とし、主体的・対話的で深い学びの成果として「知識・技能」「体力」が身につくという『思考力』を中核とした登山型体育カリキュラムモデル(図1)が提案される。

「共生体育」を導入する際に、もっとも障壁となるのがスポーツにおける勝敗の存在である。なぜなら、勝利を目的とした学習デザインを設定すれば、障害児や格差の低水準児童生徒は、そのチームから排除されやすくなるからである。

そこで、「仲間の状況に応じてルールや場を工夫するなど様々な楽しみ方や関わり方があることを学ぶ機会とする」という思考の転換が重要になる。具体的には「アダプテーション・ゲーム」の採用である(詳細は後述)。アダプテーションとは適合であり、対戦相手に応じてルールを可変的に行うゲームといえる。障害を有する児童や男女差を考慮したルールなどは事前に設定し合意しておく。さらに、競争に負けたチームには「自分たちが少し有利になるルール」や「相手が少し不利になるルール」を創れる権利を与え、合意形成を図りながら全員が全力で取り組める50:50ゲームを楽しみ合うという具合である。「学び合い」においては互恵性が不可欠であり、格差の高水準から低水準の子どもたちが互いに遠慮なくゲームに参加できる「ハンディキャップ・ルール」の協働創発がアダプテーション・ゲームの特徴だといえる。

ところで、従来の体育科では特定の技能の獲得を目的化する傾向にあった。しかしながら、多くの成人は競争的スポーツから遠ざかり、日本の医療費が年間40兆円を超える現在、生涯を通じた健康 Well-being を目的とする必要がある。これからの体育科では、UNESCO の

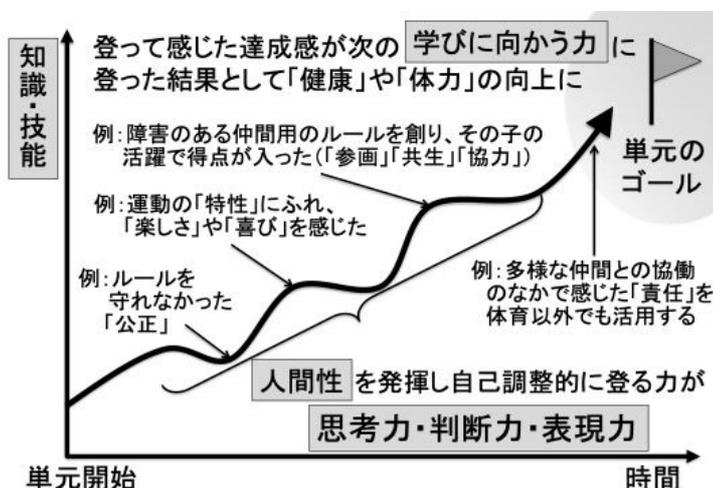


図1:「思考力」を中核とした登山型体育カリキュラムモデル

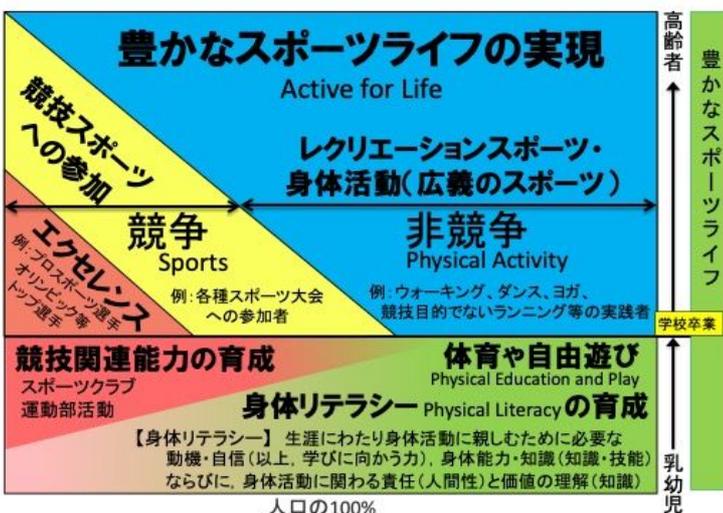


図2 身体リテラシーと体育・スポーツ・身体活動の関係

③ 共生体育の実践事例

学習者間の「ちがい」を受け容れ、活かし合うための一手法としてアダプテーション・ゲームが台頭してくる。すなわち「勝利の不確定性」を保持するために対戦相手に応じてルールを変えられるゲームであり、アダプテーション・ゲームの特徴は、図5に示すPDCAサイクルを実践することだと換言できる。

において教師は、そのゲーム自体の本質的な面白さ(運動の特性)を味わわせるゲームデザインをし、学習者に提示する(Plan)。ゲームデザインにおいて重要なのは、少ない得点や時間で規制された簡潔に終了するゲームとする点である。なぜなら、チーム間格差は当然存在するものという前提に立ち、その格差を埋めるためのルール創出がアダプテーション・ゲームの特徴であり、本PDCAサイクルは何度も回す必要があるからだ。なお、少ない得点や短時間でゲームが終了してしまうため、少人数でのチーム構成や運動の得意な学習者一人だけが活躍することのないコートサイズ設定もゲームデザインのポイントとなる。

では、のゲームを全ての学習者が全力で実践する(Do)。

では、のゲームにおいて(a)「自チーム内の全員が、各自の全力を尽くしているか」を確認した上で、(b)「相手チームと自チームとの格差」の確認をする(Check)。これらの振り返りにおいては(a)(b)いずれの確認においても「運動の特性を深く味わえているか」が焦点になる。

では、対戦相手同士が「勝利の不確定性」を担保する(「勝つ/負ける」が50:50になる)ルールを、教師の与えた選択肢から選択、または主体的に協働創造し、合意形成を図る(Act)。ここではゲームに負けたチームに主導権が与えられる。例えば、(a)の自チーム内の視点では、バスケット的なゲームにおいて、負けたチーム内に車椅子の学習者Aさんがいた場合、「Aさんの膝の上に載せたボールは秒間誰も取ることができない」という個別のルールを付け加えるといった具合である。おそらく従来の固定ルールでは、ゲームにすら入れてもらえなかったAさんが「突破」の中心的な役割を担うであろう。当該チームの戦術は、Aさんの突破からいかにシュートに繋ぐかという、障害のある学習者を中核に置いた内容にアップデートされるはずである。また、(b)のチーム間格差の視点では、負けたチームの問題点が「シュートを打つ瞬間に焦って外しやすい状況」であったならば「シュート姿勢に入った時は守備側の学習者は2秒間プレッシャーをかけてはいけない」といったルールを提案し、次のゲームを行うといった形で進める。ポイントは、自分たちのどこが問題なのかを明確にした上で、その解決に繋がれ、かつ技能向上に資するルールを提案するところにある。

その後、学習者主体でデザインされた新たなルールに基づくゲームをとして新たなPDCAサイクルが始まる。

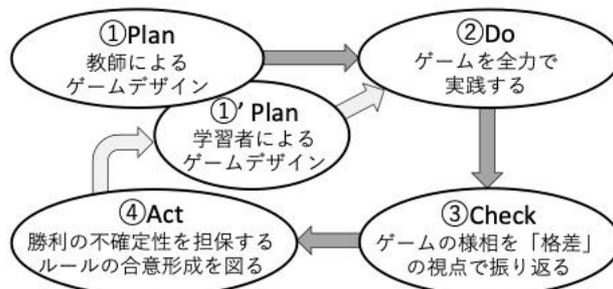
なお、の認知学習場面に時間をかけすぎない点も重要である。最初は、教師の与えた選択肢からの選択が望ましいであろう。体育ゆえに、やはり運動学習に時間をかけるべきである。

④ 共生体育の理念

アダプテーション・ゲームに代表されるように「共生体育」においてはダイバーシティ・インクルージョンという理念を教師と学習者で共有しておかなければならない。経営学におけるダイバーシティとは「多様性を尊重し、迎え入れる」という思想であり、インクルージョンとは「その多様な個人の有する能力を最大限に発揮できるようにする組織改編」を意味する。つまり、「共生体育」では、性差、体力/運動格差、障害の有無等の「ちがい」を受け容れ合い(ダイバーシティ)、「ちがい」によって生じる個々の能力差を活かし合うチーム/学級づくり(インクルージョン)という理念を基盤とすべきだといえるのである。

加えて、体育におけるゲームゆえに勝利追求主義という理念も不可避である。勝利を目的化すると(勝利至上主義)、不利益を被る学習者が生まれやすくなる。競争を手段として各運動領域の特性に没頭させることが大切である。すなわち、勝利の不確定性の面白さを理解し、「いま-ここ」の局面の競争過程に共に夢中になれるような関係デザインが求められる。ここでいう「共に」とは突破での50:50の面白さを味わうためには、必ず相手が必要だという視点に立ち、対戦相手を互いにリスペクトしつつ勝利に向けて全力で取り組むということの意味する。

全ての学習者に対して、生活の基盤となる健康と、文化としてのスポーツを学ぶと同時に、格差受容という人間性の涵養に繋がれるのが、「共生体育」の理念である。



【アダプテーション・ゲームの前提】

- ・学習者間の「ちがい」を知り、受け容れ合う(ダイバーシティ)
- ・「ちがい」のある個の力を活かすチームづくり(インクルージョン)
- ・勝利の不確定性(勝つ/負けるの50:50)の面白さを知っている(勝利追求主義)

図5 アダプテーション・ゲームにおけるPDCAサイクル

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計21件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 村瀬浩二 | 4. 巻 66(5) |
| 2. 論文標題 「気になる子」と周囲の関わり | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 70-72 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久 | 4. 巻 66(6) |
| 2. 論文標題 就学前からの障がいのある子とない子のインクルーシブ遊び | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 70-72 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久, 矢邊洋和 | 4. 巻 66(8) |
| 2. 論文標題 共生スポーツの実践者として育つ：電動車椅子サッカーのリバース・インテグレーションの学びから | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 70-72 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 村瀬浩二 | 4. 巻 66(9) |
| 2. 論文標題 複式学級に見るインクルーシブ体育 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 70-72 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 矢邊洋和, 梅澤秋久 | 4. 巻 66(10) |
| 2. 論文標題 運動をする子としない子の格差を包括する体育 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 70-72 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久, 矢邊洋和 | 4. 巻 66(11) |
| 2. 論文標題 「運動格差」を包括するボール運動実践 アダプテーション・ゲームの活用ー | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 70-72 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 藤本照美, 梅澤秋久 | 4. 巻 66(12) |
| 2. 論文標題 中学校における共生ダンス 性別・障がいの有無・能力差のインクルージョン | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 70-72 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久, 堀切遼一 | 4. 巻 67(1) |
| 2. 論文標題 幼小連携による年齢差を包括した運動遊び実践 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 70-72 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 中道莉央 | 4. 巻 67(3) |
| 2. 論文標題 総合型地域スポーツクラブにおけるインクルーシブ 地域スポーツにおける共生の視点 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 70-72 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久 | 4. 巻 65(11) |
| 2. 論文標題 体育学習における「共生」を考える | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 33-35 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久 | 4. 巻 65(11) |
| 2. 論文標題 全ての学級で不可避なインクルーシブの教育原理 | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 46-48 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久 | 4. 巻 65(12) |
| 2. 論文標題 「良質の体育(QPE)」におけるインクルーシブ | 5. 発行年 2017年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 70-72 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久 | 4. 巻 66(2) |
| 2. 論文標題 真正の共生体育の在り方ー4つのレベルで考えるー | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 60-62 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|---------------------|
| 1. 著者名 朝倉了健, 露木隆夫, 梅澤秋久 | 4. 巻 66(3) |
| 2. 論文標題 インクルーシブ体育の導入ー成功に導く教師のはたらきかけの実践例ー | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 58-60 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 中道莉央 | 4. 巻 66(1) |
| 2. 論文標題 障害のある子/ない子が共に学ぶ体育に求められる工夫 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 68-71 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 斉藤洋介, 梅澤秋久 | 4. 巻 66(7) |
| 2. 論文標題 ムーブメント教育に基づくインクルーシブ体育の実践 | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 73-75 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久 | 4. 巻 67(4) |
| 2. 論文標題 外国にルーツのある子どもを包括する体育 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 66-68 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 鈴木亜美, 梅澤秋久 | 4. 巻 67(5) |
| 2. 論文標題 障害のある子を包括する長縄跳び実践 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 66-68 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 村瀬浩二, 西脇公孝 | 4. 巻 67(6) |
| 2. 論文標題 中学校体育でのアダプテーションゲーム | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 66-68 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 藤原亮治, 梅澤秋久 | 4. 巻 67(7) |
| 2. 論文標題 障がいの有無, 異年齢, 性差を包括するインクルーシブスポーツ創造プロジェクト学習 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 74-76 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久 | 4. 巻 67(10) |
| 2. 論文標題 豊かなスポーツライフの実現と共生体育 | 5. 発行年 2019年 |
| 3. 雑誌名 体育科教育 | 6. 最初と最後の頁 66-69 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計2件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

| |
|------------------------------|
| 1. 発表者名 梅澤秋久 |
| 2. 発表標題 真正のインクルーシブ体育理念の検討 |
| 3. 学会等名 日本体育学会 |
| 4. 発表年 2017年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 UMEZAWA Akihisa |
| 2. 発表標題 Collaborative creation of inclusive sports: Physical education in high school project-based learning |
| 3. 学会等名 The 2019 International Conference for the 8th East Asian Alliance of Sport Pedagogy |
| 4. 発表年 2019年 |

〔図書〕 計1件

| | |
|------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 梅澤秋久、苔野一徳 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 大修館書店 | 5. 総ページ数 253 |
| 3. 書名 真正の「共生体育」をつくる | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------------------|--|---|----|
| 研究 分 担 者 | 中道 莉央 (Nakamichi Rio) (30550694) | びわこ成蹊スポーツ大学・スポーツ学部・准教授 (34205) | |
| 研究 分 担 者 | 村瀬 浩二 (Murase Koji) (90586041) | 和歌山大学・教育学部・教授 (14701) | |